

2. 随 想

私と情報処理センター

熱帯医学研究所

嶋田 雅暁

私の場合、疫学調査をやっている内にいつの間にか情報処理センターを利用するようになった。センターを利用するといっても、たった一つの統計パッケージを馬鹿の一つ覚えで使っているだけ。自分で独自に複雑なプログラムを組み「コンピュータ」を使いこなしている方々には遠く及びもつかない。「情報」の「処理」などとはそれこそ言えない。単なる計算機代わりのようなものだ。

ほんの10年前、紙と鉛筆で一生懸命「正」の字を書いていた。8年前は電卓。何度も計算が合わないで困った事を思い出す。アフリカのケニアで3000名ほどの調査データを扱うことがあった。そのとき初めてコンピュータと言うものを使ってみようと思った。たまたまNECのPC8001という当時はやりのパソコンと、BASICの手ほどきをしてくれた良き先輩にめぐまれたということがあった。とはいっても、今でもそうだが、まるで泥縄の学習だった。まず彼の作ったプログラムリストを片手に、何がパソコンに起こっているのかを念入りに調べた。教科書らしいものは当初はなかった。日本から送られてきた本でいきなり疑問が氷解ということもあった。コンピュータが使えるようになると、その自体は楽しいことだったが、肝心のデータ処理がいっこうに進む気配のないことに気づき始めた。バグ取りに時間を食われるのだ。単純なスペルのミスから、思いもかけないプログラムの動きまで、何度泣かされたことか。というわけで今でも、当時、時間の節約になったかどうかは疑わしいと思っている。しかし計算の間違い、これだけは本当に完全に無くなった。計算を何度も繰り返す必要がないという事は、何にも替え難くうれしかった。

日本に帰ってみて驚いた。パソコンの勃興期であった。なんと、自分が苦勞してプログラミングしたものよりはるかに優秀な（と思わせる）ソフトパッケージもすでにいくつかあった。使ってみると、自分のものではないせいか、使い心地は良いとは言えなかったが確かに便利。プログラムを組む時間も節約できる。何度か使った。そうしたある日、どうしても腑に落ちない結果に気づいた。幸か不幸かそのソフトは、BASICで書かれていたので中を覗くと、何と重大な間違い。プラスであるべきところがマイナスという単純な誤り。それからというもの、初めて使うプログラムには必ず教科書などからの例題をやってもらうことにした。おかげでそのあとも一度あやしいのを事前に発見し、大事に至るのを防ぐことができた。どんなプログラムにも間違いはあるという当り前のことをそこでそこで再認識し、信頼のおけるソフトが心底欲しいと思った。

「情報処理センター」の大型計算機というものについては、幾人かの人たちからの薦めがあっ

て初めてその存在を知った。端末も満足に使えないのに、パソコン端末からアクセスするという、例によつての泥縄式学習法。何か知っていそうな人には初対面でもしつこく聞き回った。皆さん親切で（どういうわけかコンピュータを扱う人にはこういうタイプの人が多い）ご迷惑ばかりかけたと思う。この場を借りてお礼を申し上げたい。使ってみればパソコンとは違って、複雑怪奇。今でも、パソコンのフロッピーにある程度の事が書き込んであるから何とかやれるだけで、それでさえまるごと人からもらったものを写しただけのものが多い。それでもその扱い難しさにもめげずにいまだに使いつつ続けている。最大の理由はそのソフトの信頼性。やっと安心して使える計算機に出合えたような気がする。こうして、今でも私の場合、「情報処理センター」は単なる計算機の延長。今の私にとってやはりあくまで計算にしか過ぎないと割り切っている。「情報」の「処理」をさせるほどの能力は持っていないし、考えてもいない。いつの日にか誰かが、私のような素人でもそんな大それた「情報処理」なるものを簡単にしてくれることを願っている。